

## 第34回母子保健奨励賞受賞者の横顔

須藤 真弓氏

(44歳) 助産師・北海道



平成4年、八雲町立八雲総合病院にて活動開始。日頃の妊産婦への関わりからメンタルヘルス支援の必要性を感じ、平成9年から産後うつスクリーニングシステムを導入、産後うつの早期発見・地域での継続的な支援に取り組んだ。近年では妊娠期からのメンタルヘルス支援を強化し、妊婦健診での面談結果を保健師の家庭訪問支援につなげるなど、地域保健機関との密な連携を図り、きめ細やかな支援でさらなる母子保健の向上に尽力した。

武藤 香子氏

(48歳) 助産師・栃木県



病院助産師等を経て、平成13年開業助産師として活動を開始。平成15年に小児科医や臨床心理士らとともに立ちあげたNPO法人ではキッズシェルターの活動を通じて地域の困難を抱える母子を支援、育児不安の解消に努めた。加えて無料訪問型子育て支援やDV被害母子の一時保護、中高生への思春期教育等にも熱心に取り組む。さらに、他の助産師と協働して育児サークルを立ち上げるなど、多岐に渡る活動で住民の厚い信頼を得た。

洞口 祐子氏

(54歳) 保健師・岩手県



昭和56年釜石市に奉職。乳幼児訪問指導に積極的に取り組み、母子保健推進員活動の支援・育成に努めた。また住民の健康情報の管理システム「すこやかさん」の構築や産後うつ病の早期発見・虐待防止に向けた取り組みなど、幅広く活動した。東日本大震災以降は支援団体との連絡窓口となり母子保健体制の整備に尽力。乳幼児健診や予防接種の早期再開、こころのケアに関する各種事業も積極的に実行し、地域の母子保健の要として力を発揮した。

張ヶ谷 智子氏

(46歳) 助産師・神奈川県



病院看護師として双胎、品胎児の出産に立ち会った経験から、いのちの大切さを実感。助産師の道を進み、平成10年に助産院を開業。地域での母子保健活動を積極的に行い、育児相談や母子訪問のほか、女性のライフスタイル全般に関する無料電話相談事業を立ち上げ、相談者の心に寄り添う対応を行った。小中高生に性と生、健康についての講義を行う「助産師が伝えるいのちのはなし」事業で中心的役割も果たし、思春期保健の充実にも努めた。

松野 才氏

(51歳) 歯科医師・秋田県



平成5年より幼児歯科健診など地域の歯科保健活動に取り組み、将来を見据えたう歯予防活動の重要性を実感。平成16年から県で取り組む集団フッ化物洗口事業「お口ブクブク大作戦」では研修を通してフッ化物洗口の安全性と効果の普及に力を注ぎ、事業の基盤を築いた。う歯の罹患状況をまとめて地域に還元し、市町村とも連携し活動した。担当する地域ではとくに大きなう歯減少率を記録するなど、多大な貢献を果たした。

磯貝 尚美氏

(53歳) 保健師・愛知県



昭和59年美浜町に奉職。育児の苦手な母親や療育支援の必要な親子を対象に保育士や臨床心理士が遊びを通じて親子の関わりを支援する通所教室を開設するなど、社会資源の不足を関係各機関との連携で補いながら人と人をつなぎ、地域のニーズにきめ細やかに応える育児支援活動を続けた。また、母子健康手帳交付時の面接や育児訪問では顔のみえる関係づくりを心がけ、きめ細かく地道に、地域ぐるみで支える母子保健活動を展開した。

田川 由美子氏

(54歳) 保健師・山形県



昭和55年、山形市に奉職。時代の変容に伴い育児不安を抱えた母親が増加していることにいち早く気づき、新たな相談事業の企画に取り組む。平成13年から1歳6か月健診に臨床心理士を配置するなど、時代のニーズに合った母子支援体制を構築した。また、平成17年からは母子保健の視点と培ってきたネットワークを活かし児童虐待対策の体制整備に真摯に取り組む、要保護児童対策地域協議会の設置に尽力するなど、指導者的役割を担った。

稲持 英樹氏

(52歳) 医師・三重県



医師不足が深刻な地域での母子保健活動に個人的に取り組み、平成12年には名張市に診療所を開設。県内唯一の母乳相談外来を併設したほか、育児支援にも重点を置いて活動した。名張市の5歳児健診導入にも大きく寄与、さらに他職種と協働し乳幼児期から学童期まで情報を共有するシステムの構築、要支援児を健診から個別療育につなげる支援計画をチーム体制で検討する等、地域母子保健活動の発展向上に大きな役割を果たした。

三宅 はつえ氏

(52歳) 助産師・茨城県



平成8年より開業助産師として活動。健診や育児相談、乳房ケア等を通して地域に開かれた母子保健活動を実施し、継続的な支援を行う。また、助産師のインターネット・コミュニティ「産婆の井戸端会議」を立ち上げたほか、妊娠・出産・育児の啓発イベントの開催やドラマや映画の出産シーン監修などを通じ多様で快適な出産イメージを啓蒙することに努めた。幅広い分野で活躍することで、助産師の活動向上に大きな役割を果たした。

南田 理恵氏

(44歳) 助産師・兵庫県



助産師として芦屋市において出産前教育や新生児訪問事業のシステム構築、母乳育児相談事業の立ち上げに貢献する。平成17年からは開業助産師として、看護師や保育士等と連携し育児教室を開催するなど親の育児不安解消に力を注いだ。また3歳児から高校生までを対象に、子どもたちが「自分が大切な存在である」と感じられるような「命の教育(性教育)」を年齢に応じた分かりやすい内容で行って好評を博し、大きな成果を上げた。

## 第35回(平成25年度)応募要領

**表彰対象** 55歳未満の者であって都道府県知事・政令市市長・特別区区长から推薦のあった個人で、母子保健事業に5年以上従事し、地域に密着した活動で著しい功績を挙げているとともに、今後も引き続き母子保健事業で大いに活躍が期待できる者を対象とする。

ただし、国・都道府県・政令市・特別区の本庁の現職員および現職の大学教授・准教授は除くものとする。

**表彰式典** 平成25年11月22日(予定)

**応募先** (財)母子衛生研究会

母子保健功労顕彰会本部事務局

〒101-8983 東京都千代田区外神田2-18-7

電話 03-4334-1151(代)

### 藤田 よう子氏

(48歳) 保健師・鳥取県



病院看護師を経て平成7年大山町に奉職。3歳児健診から就学までの期間に親子との関わりが途切れてしまうことを危惧し、また発達障害児支援の必要性も実感したことから、全国に先駆けた5歳児健診の導入に尽力した。支援の必要な子どものスムーズな就学や、就学後の支援体制整備のために保育士や教育委員会等とも連携し、それぞれの専門性を発揮できる体制を強化。多職種が子育てをサポートする活動の要として地域に貢献した。

### 永見 道枝氏

(52歳) 保健師・山口県



昭和56年秋芳町に奉職。地域で保健活動が続けるなか、虐待の増加などから時代の変化を実感。出産後早期から育児支援を行えるよう母子保健推進協議会の組織強化に努めた。また平成18年からは、新設された子ども相談室で要保護児童対策地域協議会の設置を推進。要保護児童対応にリーダーシップを発揮する一方で幼稚園・保育園の職員、学校の教員のための児童虐待対応マニュアルを作成するなど、困難な育児の支援に熱心に取り組んだ。

### 高川 明美氏

(44歳) 臨床心理士・徳島県



精神科病院に勤務しながら、平成9年より小中学校のスクールカウンセラーを務め、関係機関と連携し特別支援教育に取り組む。乳幼児期から学齢期、その先の年代まで子どもの育ちを途切れなく見守る活動を目指し、不登校のみならずひきこもりの若者への相談支援にも尽力、先駆的な役割を果たした。また、乳幼児健診では早期療育が必要な親子のフォローを行い、継続的支援につなげるなど地域の母子保健活動に大きく貢献した。

### 丸山 有子氏

(54歳) 医師・鹿児島県



周産期医療の3次施設でハイリスク妊婦の管理、病的新生児の集中治療に取り組んだ経験から退院後の母子を取り巻く環境整備の必要性を実感し、平成19年から着任した病院において家族のケアやフォローアップに力を入れた外来部門を構築。ハイリスク児を積極的に受け入れ、地域の保健師等と連携し児を就学後まで長期的に見守るなど、継続して献身的なサポートを行い、県内の周産期医療と家族支援の向上に多大な功績があった。

### 森 伴子氏

(54歳) 助産師・宮崎市



病院助産師を経て県委託の訪問指導活動を開始。「楽しい育児」を活動理念に乳房ケアの傍ら精神面のフォローも行き、個別のきめ細かなアドバイスで母親の育児不安の軽減と問題の発見に努めた。助産師が伝える「命の教育」出張講座や祖父母のための育児教室、女性のライフステージを通じた健康支援にも熱心に取り組み、長期的視野で家族を支援する活動を行って成果を上げた。若い世代の模範となる存在として後進の育成に大きく貢献した。

## 母子保健奨励賞の応募から決定、表彰式典までの日程(予定)

